

 B. 各支部から

鈴木光太郎著 「オオカミ少女はいなかった」

前 新潟県小児保健研究会支部長

新潟大学医学部小児科

内 山 聖

情報が氾濫している現代社会は、確かな情報の取捨選択がきわめて難しい時代といえる。日常生活における医学的な事例も例外ではない。たとえば、野菜にがんを減らす効果があることは以前からわかっていた。肺ガンとたばこの関係を最初に指摘したオクスフォード大学ドール教授は、「βカロチンは細胞のガン化を促すフリーラジカルや活性酸素を減少させる。野菜のガン予防効果はβカロチンによるに違いない」と考えた。あくまで仮説に過ぎなかったのに、いつのまにか世間の常識となり、βカロチンを売りにした食品やサプリメントが巷に溢れていた。そして20年前、多くの期待を集めて、男性喫煙者3万人を対象とした大規模研究がスタートした。台本では、βカロチンの肺ガン予防効果が立証されるはずであったが、中間解析で予期せぬ正反対の結果が出て、やむなく研究は中断された (New Engl J Med 1994; 330: 1029)。同じ頃、マーガリンに多く含まれるリノール酸が動脈硬化を予防し、健康に良いという、リノール酸神話が誕生していた。安くて健康に良いとあれば、迷わず神話の世界に飛び込むのが、わが家は無論、一般庶民の行動であろう。しかし、やはり大規模研究で、心筋梗塞による死亡がリノール酸摂取群で多くなり、神話はもろくも崩壊してしまった。今はまた、マーガリンに含まれるトランス脂肪酸が問題になっている。

前置きが長くなったが、鈴木光太郎著「オオカミ少女はいなかった—心理学の神話をめぐる冒険— (新曜社)」を紹介したい。著者は、新潟大学人文学部実験心理学の教授である。1920年、インド

新潟県小児保健研究会

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通1-757

新潟大学医学部小児科内

で狼に育てられた2人の少女、アマラとカマラが見つかり、発見者であるシング牧師の孤児院で育てられた。四つ足で走り、夜には遠吠えするなど、行動は狼そのもので、詳細な記録と写真が残されている。年少のアマラは1年ほどで死んだが、年長のカマラは約9年間生き延び、少しずつ人間らしさを取り戻している。しかし、急ぐときは四つ足になり、9年たっても言葉は40語ほどしか覚えなかったらしい。

大脳には140億の神経細胞があり、各々から2～4万のシナプスが伸び、神経回路の配線は2歳までにほぼ完了するという。この時期に十分なスキンシップがないと、表情に乏しく、喃語や笑いが少ない子 (サイレントベビー) になり、その後の発達にも影響する。まして、カマラのように人間的な環境が一切ない狼社会に育てられると、人間社会に戻っても言葉を覚えず、社会性も身に付かない。育児のアドバイスを行うとき、これほど人々の興味をひき、具体的で、かつ説得力のある話はめったにない。私自身、疑問に思う点がいくつかあったが、写真もあることだと、どこか信用したがっている自分がいて、結局は便利に使わせてもらってきた。だから、本書のタイトルを垣間見た瞬間に、これまでの私の「したり顔」を恥ずかしく思い、誰が相手というわけではなく、申し訳ない気分になった。読み進むと、記録や写真がどのように捏造され、なぜ人々が信じられるようになったのか、順序立てて読者に、いや私自身に迫ってくる。

いずれの話題も、ごくわずかな証拠や推論に基づいた情報を繰り返し目や耳にしているうちに、確かな情報と思い込んでしまった事例であろう。情報を自分のものにする難しさと重要性、さらに、他の人に指導する責任の重さを改めて感じている。